

[成果情報名] 底びき網漁業により漁獲されるスルメイカの生息水深帯

[要 約] 本県の底びき網漁業により漁獲されるスルメイカは、6月～12月の水深150～350mに生息していると考えられる。

[部 署] 山形県水産試験場・海洋資源調査部

[連絡先] TEL 0235-33-3150

[成果区分] 研

[キーワード] スルメイカ、底びき網漁業

### [背景・ねらい]

本県沿岸域で漁獲されるスルメイカは秋季発生系群とされ、主にいか釣り漁業にて漁獲される。近年スルメイカの資源量が減少しており、本県いか釣り漁業者が大打撃を受けている一方、底びき網漁業によるスルメイカの漁獲量は増加傾向にあり、特に2019年の漁獲量の増加は著しく、この傾向は全国的にみられる。このスルメイカの生息水深帯および出現時期を把握することを目的とした。

### [成果の内容・特徴]

- 2001年から2019年までの水揚げデータより、スルメイカを10kg以上漁獲した底びき網漁船延べ隻数（以下“スルメイカ入網隻数”）を年別に集計し、底びき網漁業の延べ操業隻数とともに推移をみると、全体の延べ操業隻数は減少しているが、スルメイカ入網隻数は明らかに増加傾向にある（図1）。
- 資源評価・調査委託事業において、漁船活用型調査として、本県底びき網漁船から操業水深、水温、操業位置および漁獲物の漁獲量を収集している。このデータから、2016年11月13日から2019年6月9日までのA船のデータを抽出し、日別の網毎の水深および底層の水温データを、スルメイカ入網の有り無しで分けて傾向を調べた（図2、3）。なお、野帳にスルメイカ入網の記載のない日は、水揚げデータからスルメイカ漁獲があったと判断された場合、その日の全ての操業で入網した、とした。全体の操業水深帯は119.2～461.8mであり、そのうちスルメイカが入網した操業水深帯は150.8～344.1mであった。
- スルメイカが入網した際の底層水温は、1.15～11.87℃と、ばらつきがあり、入網と水温の関係はみられなかった。
- スルメイカの入網は6月から翌年2月（禁漁期の7、8月を除く）であった。この水深帯は、ハタハタ、マガレイ等の漁場（アラ場）であり、特にハタハタ、マガレイ、ホッケ等を狙って操業する際に、スルメイカが混獲されると考えられた。また、別の底びき網漁業者からの聞き取りによると、近年アラ場での操業回数が増えたわけでもなく、スルメイカが多く入網するようになった、とのことであった。
- 県内全域でのスルメイカ入網隻数を月別に集計したところ、スルメイカは主に6月、9～12月に入網する頻度が高いことが明らかになった（図4）。この傾向は、本県沿岸へのスルメイカ来遊時期と重なるため、本県底びき網漁業によって漁獲されるスルメイカは、秋季発生系群および冬季発生系群である可能性が高い。

### [成果の活用面・留意点]

- 今回の情報は、今後のスルメイカ資源評価の際に、底びき網によって漁獲されるスルメイカの移動特性を考慮することに役立てられると考えられる。また、本県の底びき網漁業により漁獲されるスルメイカの系群については、平衡石の日周輪解析が必要である。
- 底びき網漁業者からの聞き取りによると、スルメイカは普段狙って操業しているわけではなく、また明け方が最も多く入網するようだ、とのことであった。底びき網漁業によるスルメイカも近年単価が上昇しており（図5）、本漁業の重要な対象魚種となりうる。これらの情報は、今後スルメイカの資源保護を実施するにあたって非常に重要であると考えられ、更なる情報収集が求められる。
- 漁獲量は山形県漁業協同組合から提供されている日別販売データを集計し、活用している。

[具体的なデータ]

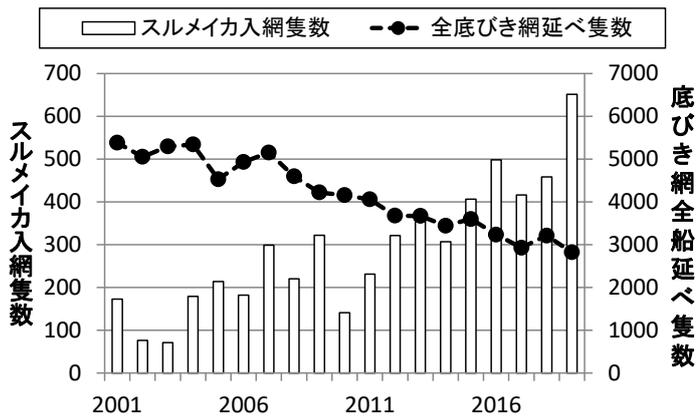


図1 底びき網漁業の延べ操業隻数およびスルメイカ入網隻数の推移

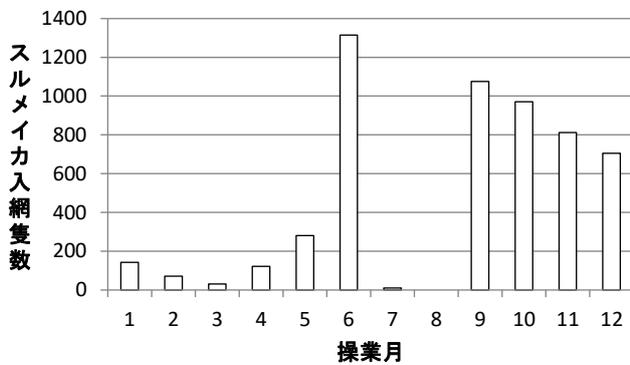


図4 月別スルメイカ入網隻数 (2001~2019年)

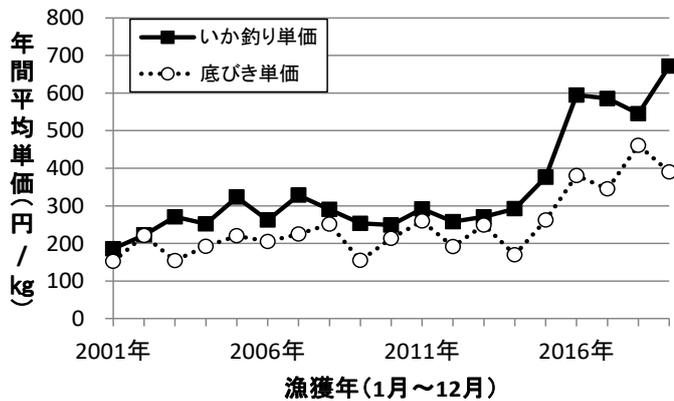


図5 スルメイカ年間平均単価 (円/kg)

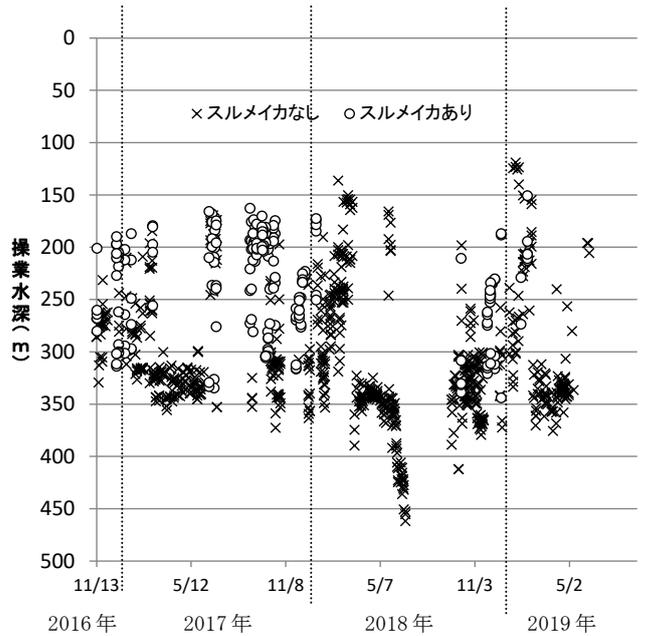


図2 底びき網漁船A船の網別投網水深帯とスルメイカ入網状況

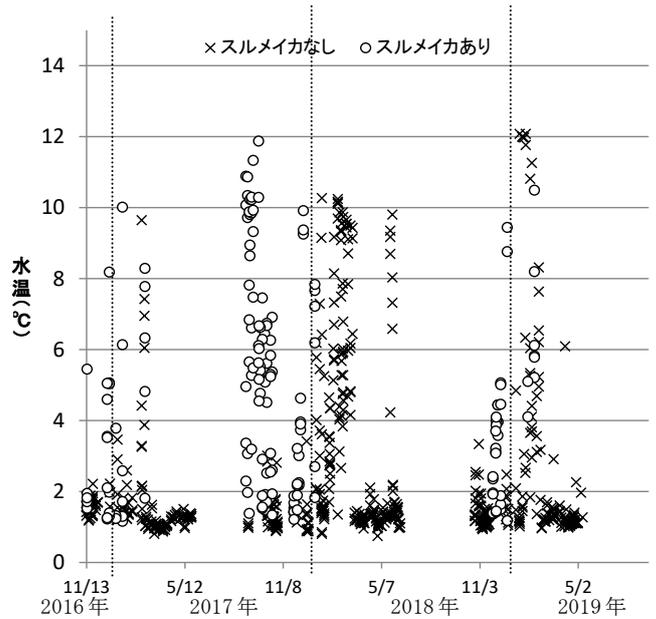


図3 底びき網漁船A船の網別底層水温とスルメイカ入網状況

[その他]

研究課題名：資源調査・評価事業  
 予算区分：受託  
 研究期間：令和元年度  
 研究担当者：太田 稔章  
 発表論文等：なし